

富田林の 自然

No. 6



1999年2月21日発行

富田林の自然を守る会

富田林の自然

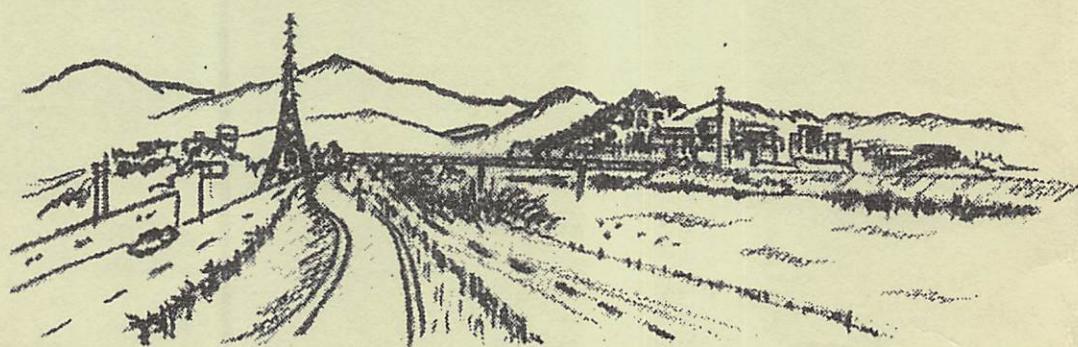
目 次

〈短歌〉

里 山	佐藤靖彦	1
表紙の写真の説明		2
奥の谷（嶽山北麓）の昆虫雑録		
	森内 茂	3
昆虫の世界（講演会資料）		
	森内 茂	8

嶽山の植物 自然観察会の記録

富田林の自然を守る会	9
編集後記	25



大和川より二上山を臨む

〈短歌〉

里山

佐藤靖彦

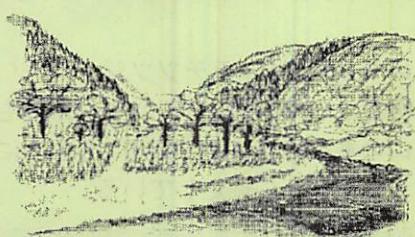
虚飾みな削きて生くるや冬枯れの里山くぬぎは透きて梢見ゆ

イラクいまミサイル炸裂するらんか藪冬枯れて朱のからすうり

好評分譲中の立看板ふるびて背高泡立草枯る

搾り取るは人間社会のみならず寄生木青あおと冬木に纏う

里山のひとつがまたも開発のためにと躋き地肌を晒す



表紙の写真

モチツツジ（つつじ科）

ツツジ科の植物の多くは低木であるが、小高木となるものもある。世界に80属1500種もの多数が知られている。ツツジ属は600種あまりが知られている。花が美しく葉や枝も鑑賞価値が高く、世界各地で多数栽培され、園芸品種は無数にある。日本では自生種は約50種で、多く栽培されている。種間雑種も多い。

モチツツジは、近畿の山では普通に見られる半落葉低木。がくや花柄には腺毛があってねばつくのでモチツツジという。花色は淡～濃紅紫色で、ヤマツツジより少し遅れて、4月～6月に咲く。ミヤコツツジはヤマツツジとモチツツジの雑種である。モチツツジの園芸種も多く、ハナグルマ、アメガシタ、セイカイハ、キンクジャク、コチョウゾロイ、テボタンがある。

富田林にはヤマツツジ、モチツツジ、コバノミツバツツジの3種がみられるが、モチツツジが最も多い。ツツジは里山の春を彩る代表である。ちなみに、富田林市はツツジを市の花に指定している。

奥の谷(嶽山北麓) の昆虫雑録

森 内 茂

プロローグ

当初は終の住処と決めたわけではなかったが、山手町(富田林)に住み着いてかれこれ四半世紀が経った。居住当時は草深い田舎といったところで、初めの5年間程は自宅軒下にブラックライトを吊るし在宅のかぎり点灯して飛来する昆虫を観察し、とくに小蛾の新鮮な個体の標本作製に熱中した。それまで田園地帯の夜間採集はあまり機会がなかつたせいか興味が尽きず、ほとんどが普通種とはいえ十分に採集を楽しんだ。そうこうするうちに周囲の開発が進みさらに空き地も放りばなしでなくなり、目立って飛来する虫の種数・個体数が激減し灯火採集の面白みが失せてしまった。ちなみに私は虫屋仲間でいう「蛾屋(ガアヤ)」である。これらの採品は、後に講談社刊の大冊「日本産蛾類大図鑑(1882)」執筆の際、美麗な図示標本として大いに役立つた。

多忙さにかまけて富田林の蛾相を調べようという意図は生じなかつたが、閑をみつけておもに甘南備・龍泉地区を散策した。楠妣庵周辺から嶽山(=

岳山)にかけての辺りが私には好ましい採集地になったが、数年前から部分的に路がペーブされたり周辺の整備が進められたりで、現在は私の採集欲を満たす場所ではなくなつた。

一昨(1996)年3月公務から解放され、かねがねその存在に興味を引かれていた「富田林の自然を守る会」に入会した。同会による昨年の数度の嶽山周辺の自然調査と夏の催し、今年の滝谷不動周辺や行事に参加することができ、先達諸賢のおかげで私には未知の場所であった「奥の谷」の生物相が少しは分かってきた。

奥の谷の昆虫

奥の谷は滝谷不動明王寺を南に入る嶽山への小道の距離約1km一帯をさす地元民の通称名。道は今では「河内ふるさとのみち(南河内地域広域行政推進協議会が設定した自然と歴史の散歩道)」の一部となっている。

富田林の植物相に精通した「富…

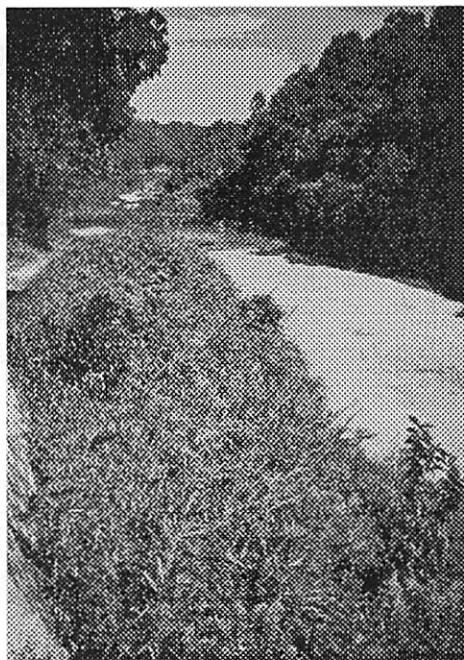
・会」の田淵武夫氏によれば、奥の谷は富田林市域内ではもっとも自然状態が保持されている地域である。面積的には狭い場所ではあるが、いわゆる里山*の典型地である。遺憾なことは、ここにも既に開発の手が伸びている。

1997年1月、初めて奥の谷に入った。道の東側は田畠と休耕田で緩い登りになり、両側は少し高地で雑木林とスギ・ヒノキの経済林が混生、西側にも小さい水田が棚田状に散在する。一見して、かつては樹液にカブトムシ、カナブン類、クワガタ類がスズメバチ、ヒカゲチョウ、ゴマダラチョウなどの類と吸液を争っていたんだろうと思わすかなりのクヌギがある。しかし、予想通りそのような光景は夏季に見られなかつた。ただ、昨年の夜間採集時に2匹の雌のカブトムシが飛来した。ともにこれ以上の小さいカブトムシはいないだろうと思わすカナブンよりわずかに大きい、飢餓型の見本のような個体であった。

超小形にしろ、カブトムシ、しかも雌がいたことは今なら何か講じればカブトムシが見られる雑木林にすることは可能であろう。差し当たり幼虫を増殖させため、毎年多くの堆肥の群れを作り自然増殖を試みる。その上で、成果がなければ、議論の余地があるが数多くの成虫なり幼虫を移入することである。もはや、手を加えなければ復活

はしない。

クワガタムシはコクワガタのみが採集された。この種はシイタケ栽培の用済みの榾木を利用すれば、案外と奥の谷に数多く発生させることができるだろう。クワガタの他種の分布はまず望みはないと思われる。かつて15年前には、約2km隔たる富田林市立第三中学校裏の小さな雑木林や山手町の集会場裏のクヌギにカブトムシ、ミヤマクワガタ、コクワガタは珍しくはなかった。岩湧山山麓の天見にクワガタ類の多産地があったがここも10年来めっきり姿を消してしまった、薪炭材の需要がなくなりクワガタムシ類の幼



奥の谷の初芝富田林高校に
より埋めたてられた沼地

*私は「里山」は「雑木林」(武藏野の平地林に対しての表現で今世紀初頭頃の造語)と同様に古くから用いられた言葉と思っていた。たまさかある審議会で四手井綱英博士とご一緒に雑談中に「里山」は同博士の造語であることを知った。

虫の生育に適した腐朽木が激減し、結果として里山からクワガタムシが姿を消していくのは、自然の摂理なのだろうか。一方では、飼育技術が目覚ましく進歩し、ある種のキノコを餌に利用して非常に大形のオオクワガタの羽化をめざす人工飼育が容易に行なわれている。蛇足ながら、蝶、甲虫、蜂類などが集まるクヌギの樹液は、そのほとんどがその部位に寄生（潜入）したスカシバ（蛾）の幼虫の摂食の結果生じるものである。ちなみに、一昨年、昨年の「富…会」の夜間採集では、参加者は夕刻から開花するカラスウリの美花を愛でることができたのは幸運であったが、カラスウリ類の茎に潜り虫瘤を形成するスカシバの幼虫は発見できなかつた。

他の甲虫類では、ドウガネブイブイ、ヤマトアオドウガネ、ヒメコガネのコガネムシ科の3種が目立った。これらはいずれも幼虫が根を食害する周知の農林業害虫である。ベイト[餌]トラップによる採集では、オオオサムシ以外にかなりの歩行虫類とシデムシ、ハネカクシ類が誘引された。皮膚炎をおこすことで著名なアオバアリガタハネカクシの灯火への飛来が目立つた。

甲虫では、さらにハンミョウ（ナミハンミョウ）のことを書いておく。ミチシルベ（道標）とも俗称されるこの美しい甲虫は、幼虫は捕食性で土中の穴に潜むが、昨年は奥の谷の最奥部の土道に散見された。今年、初芝富田林高校は奥の谷の2か所の沼沢地を埋め立て広場を造成したが、そこに本種の大発生が見られた。適した環境があれば

たちまち植えることの証拠を見せられた。

ハンミョウとは逆にこの埋立てによって、消滅した昆虫がいる。この沼にはガマが群生し、幼虫がその雌蕊内の種子を食べる小蛾のガマトガリホソガ（カザリバガ科）がそれらのガマで発生していた。未調査であったが、ガマとともに数種の水生植物が消え、それらに依存していた何種かの昆虫が見られなくなったことは間違いない。

蝶では、栽培植物に関係した種、すなわち柑橘を寄主とするアゲハ、モンキアゲハ、クロアゲハ、ニンジン・ミツバなどに寄生するキアゲハなどの大形のアゲハチョウ、幼虫がユリ類の葉を食害するルリタテハをはじめ、4月にはアブラナ科植物に寄生する可憐なツマキチョウが多く見られた。また各種のスマレ類を食草とするツマグロヒヨウモンは春から秋にかけてごく普通に見られた。オオムラサキとゴマダラチョウの幼虫の食樹であるエノキは各所にあるが、前者の成虫は目撃できなかった、ベニシジミ、ヤマトシジミなどその他の普通に見られた種についてはここでは触れない。

ガマトガリホソガを既述したが、多くの種を含む蛾類は、別の機会に詳述したい。ただし、一般によく知られる大形のヤママユガ科では、オオミズアオが1匹灯火にきたに過ぎないが、ヤママユ、クサン、ウスタビガの幼虫または蛹を寄主とする葉上で見つけた。

トンボ類：夏季オニヤンマが道に沿った水路上を徘徊、雌が産卵行動をとる

のをしば目撃した。立地条件からみてオニヤンマのやご(幼虫)の生息には好ましい水路であるが、いかんせん水路は三面貼りであり成長は難しく、もし昔ながらの水路であれば、と思うのは我々が虫が良すぎるのであろう。

溜池や発生源としての水田があるので、トンボの数はかなり多い。上記のオニヤンマ以外に捕獲あるいは確実に目撃した種のみを列挙する: カワトンボ, キイトトンボ, アジアイトンボ, フタスジサンエ, カトリヤンマ, ギンヤンマ, タカネトンボ, ハラビロトンボ, コフキトンボ, オオシオカラトンボ, シオカラトンボ, アキアカネ, ナツアカネ, マユタテアカネ, ショウジョウトンボ, コシアキトンボ, ウスバキトンボ, チョウトンボ。とりわけコメントを加える種はない。

ハッチョウトンボを見つけるたいと思うが無理であろう、ムカシトンボは金剛山麓の渓流にはかなりの分布地があるが、嶽山周辺では分布の可能性はないと思う。

双翅(ハエ)類についてはミカドガガンボのみをあげておく。本種は日本産のガガンボ類中の最大種で1匹ではあるが7月に採集された。体は細長いが、開張では日本産ハエ類中でも最大、幼虫は水生である。嶽山地域からは初めてみた。

直翅(バッタ)類ではクツワムシは発見できなかった。これまで知られているかぎり、富田林とその周辺産のはすべて褐色型で、甘南備には多産する。キリギリスはごく普通、外見的に似る

が樹上にいるヤブキリも採集された。外来種ながら各地にひろがった樹上性のアオマツムシは滝谷不動の桜並木に今や普通に見られるが、奥の谷では現在のところ未発見。しかしいる可能性は大きい。ウマオイは奥の谷のはすべて長声型のハヤシノウマオイである。他の鳴く虫として著名なカネタタキ、マツムシ、スズムシ、カンタンについては、スズムシ以外は未確認。エンマコオロギは多いが他のコオロギ類はあまり調査をしていない。以上はキリギリス亜目に所属するバッタ類である。

バッタ亜目では、トゲヒシバッタ、ハネナガヒシバッタ、オンブバッタ、ショウリヨウバッタ、クルマバッタ、トノサマバッタ、コバネイナゴが草地に普通であった。

カゲロウ、カワゲラ、カマキリ、カメムシ、ナナフシ、シリアゲムシ、トビケラ、ハチなどの仲間は、採集の資料が乏しく触れない。ユスリカ類以外の水性昆虫の灯火への飛来は予想よりも少なかった。ウンカ・ヨコバイ類のうち、灯火に飛來した稻作害虫は昨年と一昨年では種数、個体数にかなりの変動が認められたがここでは割愛したい。

最後に脈翅(アミメカゲロウ)類昆虫について: 幼虫は水生で漢方薬の孫太郎虫(小児の疳の薬)として知られるヘビトンボが、数匹灯火に飛來した。農作業小屋の軒下に摺鉢状の穴を作っているアリジコクが見つかったが、それらの成虫コウスバカゲロウも夜間採集時に採られた。トンボに似ているツノトンボが1匹、夜間に飛來したが、

幼虫はアリジコク同様に捕食性であるが地上性である。幼虫・成虫とともにアブラムシを捕食する有益虫クサカゲロウ類ではヨツボシクサカゲロウの灯火への飛来が目立った。吉凶の知らせとされるうどんげ(優曇華)の花はこの類(クサカゲロウ)の卵である。

エピローグ

なるべくよく知られた昆虫を中心に、分類学的配列を無視して記述した。書かねばならないことは、奥の谷の昆虫の質と量(種数と個体数)の問題であろうし、近接地とのそれらの比較、分布上注目される種、さらにはいわゆる希少種がいるか否かであろう。はなはだ無責任であるが、現在の私の知識では無理であることを吐露し、ご勘弁願う。すべては今後の調査、検討に待ち、今は富田林に残された価値のある里山としての「奥の谷」の開発が進行しないことを切望する。

昆虫が少なくなったのは事実である。その原因は誰もが考えるように複合的なものであることは間違いない。自然保護・環境保全が叫ばれながらも、昆虫にとっては我が国の現状はその生息環境の縮小、悪化に邁進している。

1990年7~8月、沿海州へ昆虫調査に出でかけた。長期間滞在したウスリ保護区は北海道の植生と似ていたが、昆虫の豊富さを隊のリーダー柴谷篤弘博士は「1930年代の日本的好採集地と同じだ」と感嘆された。廃屋に近い宿泊所の周囲は毎日のように新しい親子連れのトラの足跡が認められ、脳

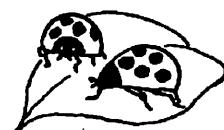
炎を媒介するマダニに脅かされ(実際2~3時間野外を歩けば必ず寄生されていた)、ヌカカの大群のため補虫網を被り夜間採集を、用便中は臀部に群がって吸血された。4週間、1度も入浴できなかった。1980年代、4度東南アジアへ昆虫調査に出た。タイのカオヤイ国立公園は昆虫の宝庫であったが、野生のゾウに出会い、キングコブランに遭遇し、何匹かのサソリを採集し、樹上からの大量のヤマビルの攻撃に悩まされ、トラに出会わないことを念じながらも、昆虫採集は楽しかった。けだし私の自然体験であり、自然是怖かった。

謝 辞：奥の谷の生物調査は石垣和美女史の支援と理解がなければ不可能であることを明記し、ここに同女史の厚情に深謝する。

附 言：今年3月28日、当会主催の下に講演を行なったが、その要旨を次頁に掲載する。字句の修正と若干の加筆をしたこと、要旨に加えて3枚の資料が添付されていたことをお断りしておく。

1998年12月29日記

もりうち しげる(〒584-0047富田林市山手町3-27富田林の自然を守る会会員)



講演会：昆虫の世界

森 内 茂

元大阪府立大学教授（農学部昆虫学研究室）、農学博士（九州大学）

日 時：平成10（1998）年3月28日（土）午後2～4時

会 場：富田林市金剛公民館

主 催：富田林の自然を守る会

昆虫は、分類学上、節足動物門の昆虫綱に所属する動物の総称である。ちなみに、ヒトは脊椎動物門の哺乳綱、靈長目、人科に属する動物の1種である。

地球上に生物が誕生してから、約30億年の間、陸上には生命はまったく存在しなかった。太陽からの紫外線の大半をさえぎるオゾン層ができ、地球上の生物の事情は一変した。現在地球上には約150万種の動物が生活しているとされるが、昆虫はその3/4を占め地球上で最も繁栄しているグループであり、実際には熱帯地方、とくに地球上の酸素の收支の1/3に関与しているといわれる南米アマゾン地域の調査が進めば、これらの数字は数倍に達することは間違いない。

昆虫は熱帯から極地、高地や砂漠、河川、湖沼、さらに洞窟や地下深層、また地下水のみならず温水、海水にまで進出し、それぞれ適応して生活している。食性の上からも、食植性、食肉性、寄生性など変化に富んでいる。昆虫が陸上の色々な環境下で繁栄している主な理由の1つは、飛翔器官として翅（はね）を生じたことである。長い生物の歴史のなかで、昆虫は空を征服した最初の動物で3億5千万前の古生代石炭紀にすでに大形の有翅昆虫がいたことが分かっている。鳥や翼竜（爬虫類）の出現は中生代ジュラ紀であるから、昆虫がいかに古くから飛翔者であったかが分かる。また、世代の速い繰り返し、体の小さいこと、変態や休眠行為、感覚器官の発達などが挙げられる。

現在知られている最も古い昆虫は、無翅昆虫のイシノミ類のもので、古生代のデボン紀から知られている（北米）。石炭紀になると多くの有翅昆虫の化石の存在が知られているが、二疊紀（古生代）にはかなりのグループが地球上から姿を消した。新生代になると、現在の昆虫の大部分のものと大差ないぐらいに分化したことが知られている。

昆虫の体は多くの体節（環節）から成り立っているが、頭・胸・腹の明確な3部分を形作り、頭部に1対の触角、胸部に3対の肢（前肢、中肢と後肢）と2対の翅（前翅と後翅）、腹部末端に1対の尾毛を具えているのが、その基本的体制である。無翅の昆虫は、元来、翅を生じなかった原始的なイシノミ類とシミ類（無翅亞綱）を除き、二次的に翅を消失したものである（例えば、シラミ、ノミなど）。昆虫の2対の翅は中・後胸のそれぞれの背板側域が側方に伸長して生じた器官で、脊椎動物の前肢が変化した飛翔器官と異なり、眞の飛翔器官である。

人類が採集・狩猟の獲得経済から農耕・牧畜の生産経済に移って以来、農業は人間と害虫との戦いであった。農業上ののみならず、森林、衛生、畜産上からも、昆虫は我々の生活に大きな影響を与えた。一方、カイコ、ミツバチは我々にとって有用な養蚕、養蜂として利用された。害虫・益虫として人間の生活に直接かかわりをもつ種はごく限られた数に過ぎないが、自然界の生態系の維持、地球環境のバランスコントロールの観点上、大部分の昆虫は我々人類にとって間接的に大きな存在である。

生物は環境に適応することによって生存してきた。長い歴史をもつ昆虫も例外ではなく、環境に適応出来なくなったものは絶滅し、あるいは適応して生き残り、また繁栄してきた。ヒト（われわれ人類）は周囲の自然環境に対し積極的にはたらきかけ、これを征服し快適と思われる世界を作ってきた。自然環境を恣意的に変えてきたヒトは、あまりにも非生物的な存在であり、今日、昆虫に与えている影響は計り知れないものがあり、多くの種が未発見、未研究のままで消滅してしまうであろう。

嶽山の植物

自然観察会の記録

富田林の自然を守る会

はじめに

嶽山は富田林市の南部の農村地域に位置し、この周辺は市の総合計画においても「緑地ゾーン」と位置づけられ、自然が比較的多く残されている地域として、市内でも貴重な存在となっている。山頂付近に“かんぽの宿”があり、周辺には観光みかん園や市立のキャンプ場もある。滝谷、汐ノ宮、中佐備あるいは竜泉方面からの農道は手軽な散策コースとなっており、春には山菜取りを楽しむ人もみられるなど、市民の憩いの場所となっている。また、クヌギ、コナラ林やアカマツ林が多く、富田林市内に残された、里山の景観を保つ数少ない地域でもある。石川と並んで富田林のシンボルともいえる嶽山の自然を保全していくことはきわめて重要なことであろう。

我々はこの嶽山を里山公園としての保全することを提言している。そして、この山の麓の“奥の谷（通称）”（写真1）の一部で、間伐、下刈り、レンゲ田づくり、草花や昆虫の観察などの活動を行っている。

今回、我々の活動の一環として実施した自然観察会で観察できた植物を区域ごとに整理して記録にとどめることとした。

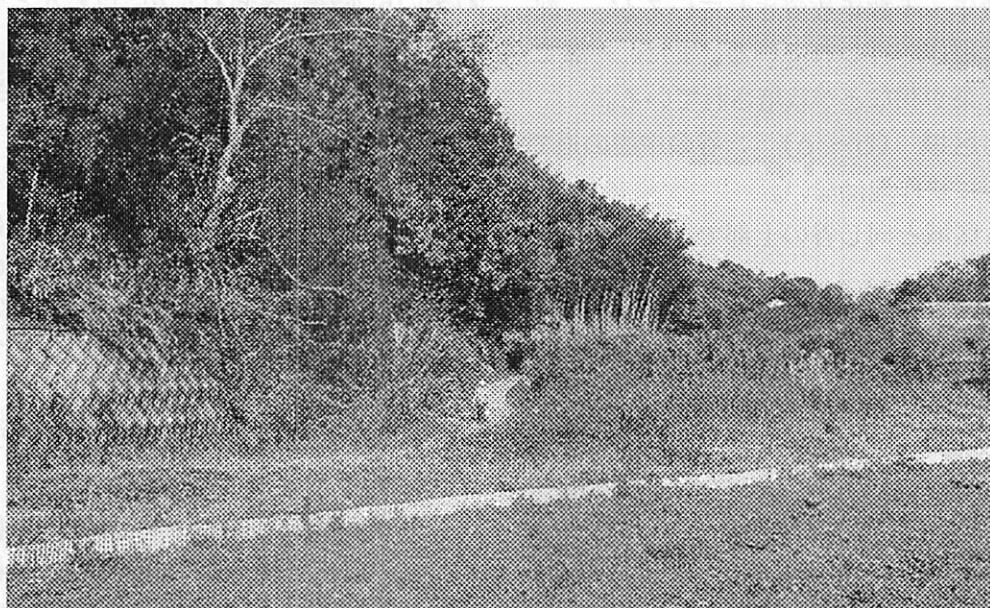


写真1 A区域（奥の谷）

調査時期

1997年1月25日、2月22日、3月23日、4月26日、5月25日、6月28日、7月27日、8月23日、9月28日、10月25日、11月23日および12月27日を行った。

調査地

調査ルートを図1(p.24)に示す。

滝谷不動尊から嶽山西斜面を山頂に至り、東斜面を通って、再び滝谷不動尊に戻る全長約4.5Kmの地域で、大部分が富田林市彼方に位置する。ルートを12区域に区切って、各々の区域ごとに出現した植物を記録した。各区域の特徴を次に示す。

A区域 (a～b;写真1)：耕作中の田畠を含む谷の農道。

嶽山西側の通称“奥の谷”と呼ばれる谷道。農道の西側は切り立った山(雑木林または植林)で、東側は約50mの幅で田圃があり、その向こうは雑木林または植林となっている。田圃の多くは休耕田で数年～十数年放置されているが、一部では稻作が行われている。また、一部では野菜や花などが栽培されている。

B区域 (b～c)：谷の中腹の道で周辺に耕作地はない。

A区域と同じ谷の上部で、谷が少し細



写真2 E区域



写真3 F区域

くなり、西側はA区域と同様に切り立った山であり、道はやや登りとなる。東側下方にはため池があり、その上下は沼地となっている。

C区域：平坦な半湿地帯。

林道を西にそれで竹藪の中を約30m行ったところにあるやや湿潤な平坦地。過去に樹木が伐採され放置されたらしく、スキなどの草原であるが、2m前後の樹木が茂り始めている。

D区域：最近開墾された果樹園。

C区域に隣接し、1～2年前に開墾され梨の苗木が植えられたが、ほとんど管理されていない。赤土が露出している。

E区域 (c～d;写真2)：舗装された林道。

両側が山林の尾根道。西側の山林の一部は前年初芝高校によって樹木が大量に伐採された(皆伐ではなく所々に大型の樹木が残されている)。アカマツ林とスギ・ヒノキの植林であるが、大半のアカマツは枯死している。

F区域 (d～e;写真3)：山中の細道。

林道から東に入る細い山道で北側は枯死したアカマツ林、南側はヒノキの植林(5～6年の幼木)。狭い谷に沿って嶽山頂上に至る道があるが、出水によって道

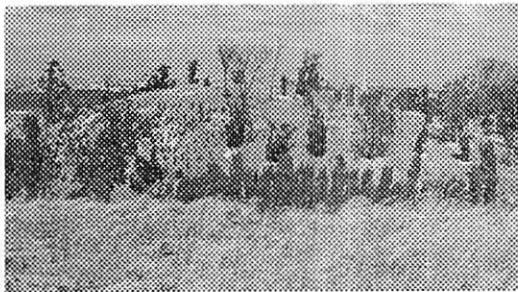


写真4 G区域

が破壊され通行できないためヒノキ林の林床を登る。

G区域 (e～f:写真4)：表土が剥がされた山頂付近。

嶽山山頂付近。数年前に山頂付近の樹木が伐採され、表土が剥がされ、赤土が露出している。また、その続きには“かんぽの宿”があり、この区域は全体が開発されている。

H区域(f～g:写真5)：日当たりのよい尾根道。

嶽山東側の尾根道で、東側斜面はミカン園や以前のミカン園が放置された状態となっている。西側は一部ミカン園と雑木林がある。

I区域(g～h)：山中の農道。

両側雑木林の部分と、ミカン園の部分がある。



写真5 H区域

J区域(h～i)：山中の農道。

両側雑木林。一部にミカン園がある。

K区域(i～j)：造成された後放置された道路。

数年前に造成された東西に走る道路。一部は舗装、一部は未舗装で、車両の通行はない。北側は水路を挟んで駐車場。南側は草原とその向こうが雑木林。

L区域(j～k)：古い休耕田とため池のある谷道。

“奥の谷”的東を平行して南に入る谷道で、耕作中の田畠はない。西側はネザサやハンノキなどが茂り始めている遷移の進んだ休耕田。東側は雑木林。

調査方法

上記ルートを歩きながら周辺の植物を観察し、各々の時点で開花（一部に花は観察しなかったが、果実または種子を観察したものを含む）していた植物を区域ごとに記録した。開花量を大雑把に目算して『ごくわずか』、『少ない』、『やや多い』、『多い』、『大変多い』の5段階分けて記録し、整理にあたっては『ごくわずか』と『少ない』を合わせて『少ない』とし、『多い』と『大変多い』を合わせて『多い』として、『少ない』、『やや多い』、『多い』の3段階で表した。

結 果

209種類の草花を観察

観察した植物のうち草本類を開花月順（同一月内は五十音順）に整理して表1 (p. 16)に示す。全部で209種であった。オシロイバナとケイトウは栽培種と思われる所以、これらを除くと207種であった。

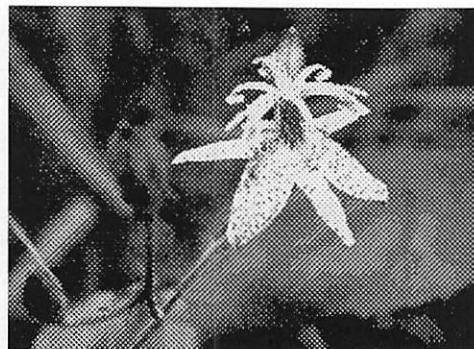
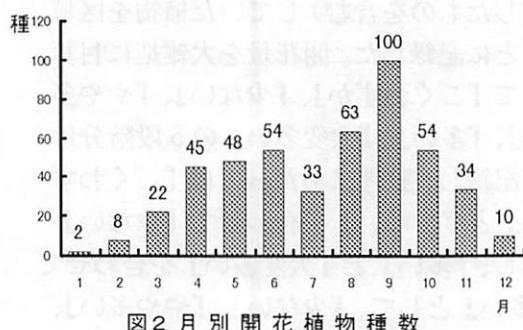


写真6 ヤマジノホトトギス

開花草花の種類数は9月が最も多い
月別に開花種類数をみると、1月が2種と最も少なく、日当たりのよいところに、セイヨウタンポポとごく一部にカンサイタンポポをみたのみであった。月が進むにつれて開花植物は増加し、2月にはオオイヌノフグリやハコベ類がちらほら見受けられるようになり、8種を観察した。3月になると、ショウジョウバカ



マ（写真9）、シハイスマリ（写真13）、ヒメウズ、タチツボスマリなど春の花が一気に咲き始め、22種と増加した。4月にはシャガ、チゴユリ（写真10）、ムラサキケマンなど45種となり、田圃の畦などがカンサイタンポポやウマノアシガタなどで一面のお花畠となった。5月にはタツナミソウ、ツルアリドオシなど48種、6月にはササユリ（写真7）、ウツボグサ、オカトラノオ、ノアザミ、ホタル

ブクロウ、ムラサキニガナなど54種となつたが、7月には33種と減少した。8月には再び63種に増加したが、この調査が8月後半（8月23日）であったために秋の草花が咲き始めたためであろう。9月には春ほどにぎやかではないが、種類は最も多く100種を数えた。田の畦にはアキノタムラソウ、ツリガネニンジン（写真11）、ワレモコウなどが、山にはツルリンドウ、キンミズヒキ、ヤマジノホトトギス（写真6）、フユイチゴなどがひっそりと咲いていた。十月にはこれらにイナカギク、ヤクシソウ、ノジギク、リンゴウ（写真8）などが加わった（図2）。

表2 原産地別帰化植物数・割合

原産地	種数	%
北アメリカ	27	51.9
ヨーロッパ	11	21.2
南アメリカ	6	11.5
ユーラシア	3	5.8
アフリカ	2	3.8
中国（台湾含む）	2	3.8
メキシコ	1	1.9
合計	52	100.0

帰化植物は北アメリカ原産が最多
観察した207種の草本のうち、帰化植物は52種で25.1%であった。帰化植物の原産地は北アメリカが最も多く27種（51.9%）で、ヨーロッパが11種（21.2%）、南アメリカが6種（11.5%）、ユ



写真7 ササユリ

ラシアが3種、アフリカが2種、中国が2種（うち1種は台湾）、メキシコが1種であった（表2）。

禿げ山の帰化率は41%，林床は0%

帰化種の出現率を区域別にみると、山中の林床であるF区域では帰化植物は全くみられなかったのに対し、長期間耕作が行われていない休耕田を含む谷であるL区域では16.7%、耕作中の田畠を含む谷であるA区域は20.0%、周辺が果樹園の尾根道であるH区域は30.4%、表土が剥がされ数年を経過したG区域では

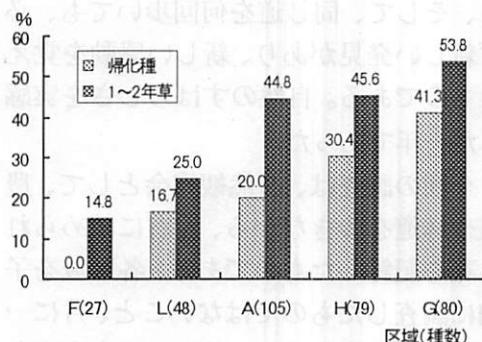


図3 区域別帰化植物および1~2年草の比率



写真8 リンドウ

41.3%と人の手が加わるほど帰化率が増加する事が見事に示された（表3、図3）。人の手が加わり、生態系が攪乱されると新しい種の進入を許すことになるのであろう。ちなみに、石川河川敷における帰化率が42.6%（176種中；石川あすかプランを考える市民連絡会）で今回のG区域とほぼ同程度であり、植物種も同一のものが多かった。石川は河川の氾濫により絶えず攪乱されていることに加え、近年の河川改修工事によって帰化植物の進入が一層多くなっているものと考えら

表3 嶽山の植物相(在来種と帰化植物の割合および多年草と1~2年草の割合)

区域	種数	在来種		帰化種		多年草		1~2年草	
		種数	%	種数	%	種数	%	種数	%
A	105	84	80.0	21	20.0	58	55.2	47	44.8
B	56	40	71.4	16	28.6	32	57.1	24	42.9
C	20	15	75.0	5	25.0	7	35.0	13	65.0
D	16	8	50.0	8	50.0	5	31.3	11	68.8
E	41	32	78.0	9	22.0	26	63.4	15	36.6
F	27	27	100.0	0	0.0	23	85.2	4	14.8
G	80	47	58.8	33	41.3	37	46.3	43	53.8
H	79	55	69.6	24	30.4	43	54.4	36	45.6
I	60	48	80.0	12	20.0	34	56.7	26	43.3
J	38	33	86.8	5	13.2	24	63.2	14	36.8
K	40	28	70.0	12	30.0	21	52.5	19	47.5
L	48	40	83.3	8	16.7	36	75.0	12	25.0
全体	206	155	75.2	52	25.2	81	39.3	126	61.2

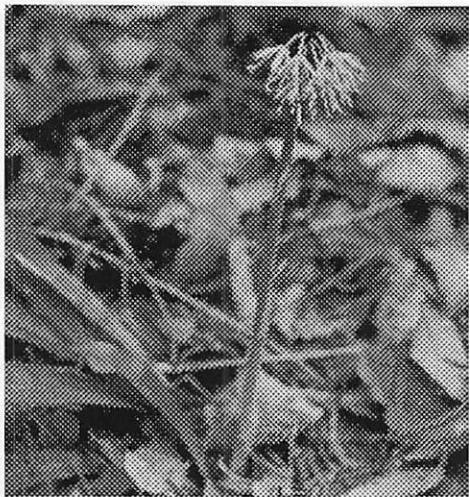


写真9 ショウジョウバカマ

れる。この石川の植物の種子が、表土が剥がされた嶽山山頂に風によって運ばれたのであろう。

また、1~2年草（表1の1年草、2年草および1~2年草）と多年草に分けてみると、1~2年草は81種（39.1%）で多年草は126種（60.9%）であった。また、在来種は1~2年草が31.0%であったのに対し、帰化植物では62.7%であった。1~2年草の比率も帰化植物率と同様に、人の手が加わるほど増加した。

木本は58種

木本類についても、開花を認めたもののみ開花月別に表4(p. 22)に示す。全部で58種であった。このうち栽培種が8種あり、これらを除くと50種であった。木本類についてはきわめて不十分な記録であるので、ここでは観察リストを示すのみにとどめる。なお、このほかにスギ（常緑針葉樹）、ヒノキ（常緑針葉樹）、ネズミモチ（常緑針葉樹）、ソメイヨシノ（落葉広葉樹）、クヌギ（落葉広葉樹）、クリ（落葉広葉樹）が存在を確認している。

また、開花はみられなかったが、ヤブニッケイ（常緑広葉樹）、サカキ（常緑広葉樹）を観察している。

おわりに

自然観察会は当会のメインの行事の一つである。これまで散発的にいろいろな所で行ってきたが、今回、ルートを固定して月一回定期的に歩くことを試みた。20人程の参加でわいわいと楽しく歩いたことであれば、真冬や真夏には世話役だけで、時には1人で寂しく歩いたこともあった。嶽山のようにごく身近で、一見何の変哲もないような山であっても、そして、同じ道を何回歩いても、必ず新しい発見があり、新しい感動を覚えたものである。自然のすばらしさを実感した一年であった。

今回の調査は、自然観察会として、農道や林道を歩きながら、左右に認められる花を記録したものであり、各区域を仔細に調査したものではないこと、月に一度（第4土曜または日曜）の観察会であるのでその間に花期が終了して観察できなかったものがあること、花（時には果実）が咲いていなかった植物は記録されていないことなど植生調査としてはきわめて不十分なものである。今後より詳し



写真10 チゴユリ

い調査が実施できればよいと考えているが、読者の方々からも嶽山の植物に関する新たな情報を寄せいただければ幸いである。

この一年間嶽山を歩いている間にも、いたるところで変化が見られた。通るたびに何処かが変わっていたといっても過言ではない。例えば山頂付近に携帯電話のアンテナが設置される、初芝高校付近の雑木林が広面積に伐採される（後に初



写真11 ツリガネニンジン

芝高校によってログハウスが建てられる），“奥の谷”的一部のハンノキ林を含む沼地とその周辺が伐採され埋めたてられる（後に初芝高校のグラウンドとなる）、中腹の山林の一部が立木を残したまま表土が削り取られる、頂上付近の元ミカン園が整地される、観光ミカン園の続きが広範囲に開墾される、嶽山東斜面に老人ホームの建設が始まる、といったぐわいである。これら一つ一つの事柄の善し悪しは別として、確実に嶽山の自然が減少

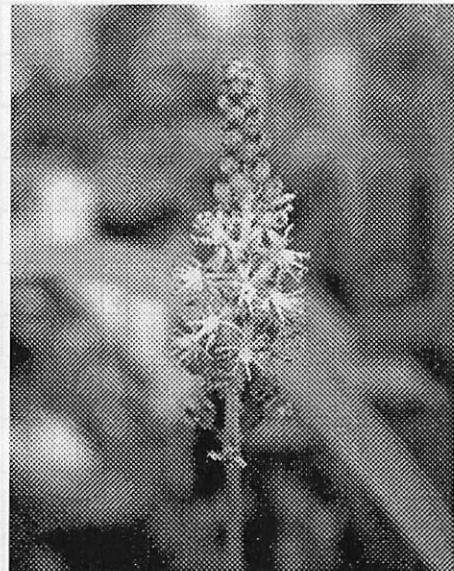


写真12 ツルボ

していっていることは間違いないのである。同じ開発をするにしても、少しでも、そこに住む生き物たちのことを思いやった計画にすれば、ずいぶんと違ったものになるだろうと思われる場面も多い。

富田林の中でまとまった形で自然が残っているのはもはや嶽山、甘南備の一帯に限られている。今回観察された植物の中にとりわけ貴重といわれる種は存在しなかったが、身近な自然としてこれらの種を、周囲の景観を含めて、この地で保全していくことが大切ではなかろうか。そのための何らかの行政的なルールづくりが望まれる。

（文責 田淵武夫）



写真13 シハイスマレ

表1 猿山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*: 少ない, **: やや多い, ***: 多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1	カンサイタンボボ	キク科	在来種	多年草	1-5, 9, 12	***	*					**	*	**	*		*
2	セイヨウタンボボ	キク科	ヨーロッパ	多年草	1-12							*	*				
3	オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ科	ヨーロッパ	2年草	2-5	**	*								**	*	
4	オランダミミナグサ	ナデシコ科	ヨーロッパ	2年草	2-4	**								*			
5	シロバナタンボボ	キク科	在来種	多年草	2-3									*			
6	ナズナ	アブラナ科	在来種	2年草	2-6	***						*	*	*	*		
7	ハコベ	ナデシコ科	在来種	1~2年草	2-5, 11-12	***	*			*		***	*	*	*		*
8	ヒメオドリコソウ	シソ科	ヨーロッパ	2年草	2-4	**				*				*			
9	ミニナグサ	ナデシコ科	在来種	2年草	2-5	*	*					*	*	*			
10	ウシハコベ	ナデシコ科	在来種	多年草	3-12	*			*			*	*				*
11	カラスノエンドウ	マメ科	在来種	2年草	3-5	**						*					
12	シハイスミレ	スミレ科	在来種	多年草	3												
13	ショウジョウバカマ	ユリ科	在来種	多年草	3												
14	スズメノヤリ	イグサ科	在来種	多年草	3-5	**						*	*				*
15	スミレ	スミレ科	在来種	多年草	3									*			
16	タチツボスミレ	スミレ科	在来種	多年草	3-4	*				*	*			*			*
17	タネツケバナ	アブラナ科	在来種	2年草	3-4	*								*	*		*
18	ノゲン(ハルノノゲン)	キク科	在来種	2年草	3-6, 12	*	*			*		*	*	*	*		*
19	ヒメウズ	キンポウゲ科	在来種	多年草	3-5							*		*	*		
20	フキ	キク科	在来種	多年草	3												*
21	ヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	3-4, 9, (実11)					*		*	*				
22	ホトケノザ	シソ科	在来種	2年草	3-4, 11	**						*					
23	アメリカフウロ	フウロソウ科	北アメリカ	1年草	4-6, 9	**						*	*	***			*
24	イワニガナ(ジシバリ)	キク科	在来種	多年草	4							*					
25	ウマノアシガタ	キンポウゲ科	在来種	多年草	4-6	*	*					**			*	**	
26	オオジシバリ	キク科	在来種	多年草	4	*											
27	オニタビラコ	キク科	在来種	多年草	4-5	*	*					**		*			
28	オニノゲン	キク科	ヨーロッパ	2年草	4, 11							*		*			
29	カキドオシ	シソ科	在来種	多年草	4								**				
30	カサスゲ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	4												*
31	カタバミ	カタバミ科	在来種	多年草	4-10	*				*		*	*	*		*	
32	キュウリグサ	ムラサキ科	在来種	多年草	4-5	*						*		*			
33	キランソウ	シソ科	在来種	多年草	4												*
34	ゲンゲ(レンゲソウ)	マメ科	中国	2年草	4	***											
35	コマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	2年草	4-7								*				
36	コメツヅツメクサ	マメ科	ヨーロッパ	1年草	4-6	**						*	*	*			
37	シャガ	アヤメ科	在来種	多年草	4	*											

表1 猿山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*:少ない, **:やや多い, ***:多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
75	アレチノギク	キク科	南アメリカ	1~2年草	6-9							*					
76	アレチハナガサ	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	6-11							*				*	
77	ウツボグサ	シソ科	在来種	多年草	6-8				*			*					*
78	エノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-10	*						**	*	*			*
79	オカトラノオ	サクラソウ科	在来種	多年草	6	*	*			*		*					
80	オヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	6		*			*					**		
81	カゼクサ	イネ科	在来種	多年草	6-9-11	*									*	*	**
82	ガマ	ガマ科	在来種	多年草	6-9		*										
83	カワラナデシコ	ナデシコ科	在来種	多年草	6												*
84	クサイ	イグサ科	在来種	多年草	6							*					**
85	ササユリ	ユリ科	在来種	多年草	6												*
86	スズメノヒエ	イネ科	在来種	多年草	6-11	*						***	**	*			*
87	チガヤ	イネ科	在来種	多年草	6	*	*					*					
88	チコクガモドキ	キク科	在来種	1~2年草	6-11	*											*
89	トウバナ	シソ科	在来種	多年草	6-9	*											*
90	トキワハゼ	ゴマノハグサ科	在来種	1年草	6-9	*											*
91	ネジバナ	ラン科	在来種	多年草	6	*											*
92	ネズミムギ	イネ科	ユーラシア	1~2年草	6							*					
93	ノアザミ	キク科	在来種	多年草	6-11	*							*	*	*	*	*
94	ノボロギク	キク科	在来種	1~2年草	6							*					
95	ベニバナボロギク	キク科	アフリカ	1年草	6-11		*	*	*	*		**					
96	ホタルブクロウ	キキョウ科	在来種	多年草	6												*
97	マメグンバイナズナ	アブラナ科	北アメリカ	2年草	6-7							*	*				
98	ミヤマタニソバ	タデ科	在来種	1年草	6-9				*								
99	ムラサキニガナ	キク科	在来種	多年草	6-8							*					
100	ヤブガラシ	ブドウ科	在来種	多年草	6-9	**	*					**	***	**			
101	フルナスピ	ナス科	北アメリカ	多年草	6-8							*					*
102	アオツツラフジ	ツツラフジ科	在来種	多年草	7,(実9-12)											*	*
103	オギ	イネ科	在来種	多年草	7	*											
104	オシロイバナ	オシロイバナ科	栽培種	1年草	7-9							*		*			*
105	セリ	セリ科	在来種	多年草	7-8	*											*
106	センニンソウ	キンポウゲ科	在来種	多年草	7-8	*								*	*		
107	ノギラン	ユリ科	在来種	多年草	7-8							*					
108	ヒラタゴボウ	アカバナ科	北アメリカ	1年草	7												*
109	ヘクソカズラ	アカネ科	在来種	多年草	7-8	*	*			*		**	**	*	*	*	*
110	ホソバアキノノゲシ	キク科	在来種	1~2年草	7-10	*						*	*				
111	ムラサキツメクサ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	7	*											

表1 岩山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*: 少ない, **: やや多い, ***: 多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
38	シロツメグサ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	4-11	*	*					*	*	*		***	*
39	スイバ	タデ科	在来種	多年草	4-5	***						*	*				*
40	スズメノエンドウ	マメ科	在来種	1~2年草	4	**	**										
41	スズメノテッポウ	イネ科	在来種	2年草	4-6												*
42	チゴユリ	ユリ科	在来種	多年草	4							**					
43	チチコグサ	キク科	在来種	多年草	4-6	*		*				*					
44	ツボミオオバコ	オオバコ科	北アメリカ	1~2年草	4-5							*	**	***			
45	ニガナ	キク科	在来種	多年草	4-6	*	*	*	*	*			*	*	*	*	*
46	ハハコグサ	キク科	在来種	2年草	4-9	*	*		*			*	*	*			
47	ムギクサ	イネ科	ユーラシア	1~2年草	4-6							*	***				
48	ムラサキケマン	ケシ科	在来種	2年草	4												
49	ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ科	在来種	多年草	4-5	*											**
50	ヤエムグラ	アカネ科	在来種	2年草	4-6	*	*		*				***	***	*		
51	ヤブジラミ	セリ科	在来種	2年草	4-5	*						*					
52	ヤフニンジン	セリ科	在来種	多年草	4												*
53	アレチギンギシ	タデ科	ユーラシア	多年草	5-6							*	*	**			
54	イヌムギ	イネ科	北アメリカ	多年草	5-6							*					
55	オオタチツボスマレ	スミレ科	在来種	多年草	5							*					*
56	オオバコ	オオバコ科	在来種	多年草	5-11	*	**		*	*		*	**	*	*	**	
57	オヘビイチゴ	バラ科	在来種	多年草	5												*
58	キキョウソウ	キキョウ科	北アメリカ	1年草	5							*					
59	ギシギシ	タデ科	在来種	多年草	5, 12	*						*					
60	コウゾリナ	キク科	在来種	多年草	5							*					
61	コヒルガオ	ヒルガオ科	在来種	多年草	5-6												
62	シナダレスズメガヤ	イネ科	南アフリカ	多年草	5-9							***					
63	タツナミソウ	シソ科	在来種	多年草	5												*
64	ツルアリドオシ	アカネ科	在来種	多年草	5												*
65	ドクダミ	ドクダミ科	在来種	多年草	5-6	**							*				
66	ナヨクサフジ	マメ科	ヨーロッパ	多年草	5							*	**				*
67	ニワゼキショウ	アヤメ科	北アメリカ	多年草	5-6	*		*					*				*
68	ハルジオン	キク科	北アメリカ	多年草	5	*											**
69	ヒメコバンソウ	イネ科	ヨーロッパ	1年草	5												
70	ヒメジョオン	キク科	北アメリカ	1~2年草	5-12	**	*		*			**	*	**	*	*	*
71	ブタナ	キク科	ヨーロッパ	多年草	5-9	*		*	*								
72	ムラサキカタバミ	カタバミ科	南アメリカ	多年草	5-9	*							*				
73	ヨウシャヤマゴボウ	ヤマゴボウ科	北アメリカ	多年草	5-9, (実9-11)	*	*	*	*			*	**	*	*		*
74	アキノエノコログサ	イネ科	在来種	1年草	6-11	**	**	*	*			**	*	**	*	**	**

表1 猿山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*:少ない, **:やや多い, ***:多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
112	メマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	2年草	7-8	*						**	*				
113	ヤナギハナガサ	クマツヅラ科	南アメリカ	多年草	7												*
114	アキノタムラソウ	シソ科	在来種	多年草	8-11	***					*			*	*	**	**
115	アキノゲシ	キク科	在来種	1~2年草	8-11	*						*			*	*	*
116	アメリカイヌホウズキ	ナス科	北アメリカ	1年草	8-11(実11)	*	*			*		*		*			
117	イタドリ	タデ科	在来種	多年草	8-10	*	*			*		*		***			
118	イヌガラシ	アブラナ科	在来種	多年草	8-11	*								*			*
119	オオアレチノギク	キク科	南アメリカ	1~2年草	8-12	*	*		***			*	*		*	*	
120	オトギリソウ	オトギリソウ科	在来種	多年草	8-9			*									
121	オニドコロ	ヤマノイモ科	在来種	多年草	8-9							*		***			*
122	オミナエシ	オミナエシ科	在来種	多年草	8			*									
123	カナムグラ	クワ科	在来種	1年草	8-9							**					*
124	カラスウリ	ウリ科	在来種	多年草	8,(実11,12)	*	*				*	*	***	*			
125	ガンクビソウ	キク科	在来種	多年草	8						**						
126	キツネノマゴ	キツネノマゴ科	在来種	1年草	8-11	**	*					*	**	*		*	*
127	キンミズヒキ	バラ科	在来種	多年草	8-9	*					**		*				
128	ケイトウ	ヒユ科	栽培種	1年草	8		*										
129	コケオトギリ	オトギリソウ科	在来種	1年草	8		*										
130	コヤブタバコ	キク科	在来種	2年草	8							*					
131	タカサゴユリ	ユリ科	台湾	多年草	8			*									
132	タカサプロウ	キク科	在来種	1年草	8-9	*										*	
133	ツユクサ	ツユクサ科	在来種	1年草	8-10	*	**		*	*		*	*	*	*	*	*
134	ヌスピトハギ	マメ科	在来種	多年草	8		*					*					
135	ノブドウ	ブドウ科	在来種	多年草	8-9,(実11)	*						*	*			*	
136	ヒナタイノコヅチ	ヒユ科	在来種	多年草	8-10	***	*			*		*		*	*		*
137	ヒメムカシヨモギ	キク科	北アメリカ	2年草	8-10	*	*		***			***	**	*		*	*
138	ヒヨドリリバナ	キク科	在来種	多年草	8-11	*		*	*	*		*					
139	ヒルガオ	ヒルガオ科	在来種	多年草	8							***					
140	フユイチゴ	バラ科	在来種	多年草	8-9,(実1-2,10-12)	*			*	**		*	*	*	*	*	*
141	ホウキギク	キク科	北アメリカ	1年草	8-10	*						*					*
142	メヒシバ	イネ科	在来種	1年草	8-10	**						***	*				*
143	ヤハズソウ	マメ科	在来種	1年草	8			*	*								
144	ヤブツルアズキ	マメ科	在来種	多年草	8-9	*	**										
145	ヤプラン	ユリ科	在来種	多年草	8							*					
146	ヤマイ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	8-9			**									
147	ヤマノイモ	ヤマノイモ科	在来種	多年草	8		*	*					*				
148	ヨメナ	キク科	在来種	多年草	8-12	*	*				*			*	*	*	*
149	ヨモギ	キク科	在来種	多年草	8-11	*	*	*		*		**		*	*	**	

表1 猿山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*:少ない, **:やや多い, ***:多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
150	ワレモコウ	バラ科	在来種	多年草	8-11	*	*							*		*	
151	アカザ	アカザ科	在来種	1年草	9		*										
152	アカネ	アカネ科	在来種	多年草	9		*	*						*			*
153	アメリカセンダングサ	キク科	北アメリカ	1年草	9-11	*	*		*			*					*
154	アレチウリ	ウリ科	北アメリカ	1年草	9									*			
155	アレチヌスピトハギ	マメ科	アメリカ	多年草	9	*	*	*	*					*			
156	アレチマツヨイグサ	アカバナ科	北アメリカ	1~2年草	9								*	*			
157	イヌコウジュ	シソ科	在来種	1年草	9-10	*		*		*							
158	イヌタデ	タデ科	在来種	1年草	9-11	*	*			*		*	*	*	*		*
159	オオイヌタデ	タデ科	在来種	1年草	9-10					*			**				
160	オオオナモミ	キク科	メキシコ	1年草	9(実10-11)	*								*			*
161	オオニシキソウ	トウダイグサ科	北アメリカ	1年草	9-10	*							*				
162	オヒシバ	イネ科	在来種	1年草	9	*								*	**		
163	カラムシ	イラクサ科	在来種	多年草	9								*	*			
164	キンエノコロ	イネ科	在来種	1年草	9-10	*						*		*	*	*	*
165	クズ	マメ科	在来種	多年草	9								*				
166	ゲンノショウコ	フウロソウ科	在来種	多年草	9	*											
167	コオニタビラコ	キク科	在来種	2年草	9							*					
168	コセンダングサ	キク科	在来種	多年草	9												*
169	コニシキソウ	トウダイグサ科	北アメリカ	1年草	9								*				
170	サワヒヨドリ	キク科	在来種	多年草	9-10			*									
171	ジャノヒゲ	ユリ科	在来種	多年草	(実9)							*					
172	スキ	イネ科	在来種	多年草	9-10	**	**		*		*		***	***		*	*
173	スズメウリ	ウリ科	在来種	1年草	(実9, 11)	*							*	*			
174	セイタカアワダチソウ	キク科	北アメリカ	多年草	9-12	***	**	*	*	*			***	***	*	***	
175	センダングサ	キク科	在来種	1年草	9								*				
176	ダンントボロギク	キク科	北アメリカ	1年草	9		*		*				*				
177	カラシバ	イネ科	在来種	多年草	9-11	*	*							*			
178	チヂミザサ	イネ科	在来種	1年草	9-11	*	*			*				**	**	*	
179	ツリガネニンジン	キキョウ科	在来種	多年草	9-11	*								*			
180	ツルボ	ユリ科	在来種	多年草	9										*		
181	ツルリンドウ	リンドウ科	在来種	多年草	9-10, (実11-12)					*	*						
182	トキリマメ	マメ科	在来種	多年草	9	*											
183	ナキリスゲ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	9			*									
184	ノアズキ	マメ科	在来種	多年草	9												*
185	ハッカ	シソ科	在来種	多年草	9								*				
186	ヒカゲイノコヅチ	ヒュ科	在来種	多年草	9-11	*	*			*	*	*	*	*	*	*	*
187	ヒガンバナ	ヒガンバナ科	在来種	多年草	9	*				*			*	*	*	*	

表1 嶽山の植物(草本)

開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*:少ない, **:やや多い, ***:多い)

No.	種名	科名	原産	1~2年草 or多年草	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
188	ヒメクグ	カヤツリグサ科	在来種	多年草	9	*									*		
189	ヒヨドリジョウゴ	ナス科	在来種	多年草	9,(実10-12)		*			*	*	*	*	*			
190	ブタクサ	キク科	北アメリカ	1年草	9												
191	ホシアサガオ	ヒルガオ科	南アメリカ	1年草	9												*
192	ボントクタデ	タデ科	在来種	1年草	9-10	*	*								*		
193	ママコノシリヌグイ	タデ科	在来種	1年草	9-10					*						*	
194	ミズヒキ	タデ科	在来種	多年草	9												*
195	メドハギ	マメ科	在来種	多年草	9			*									*
196	メリケンカルカヤ	イネ科	北アメリカ	多年草	9-11			*									
197	ヤブマメ	マメ科	在来種	多年草	9			*									
198	ヤマジノホトトギス	ユリ科	在来種	多年草	9												*
199	イナカギク	キク科	在来種	多年草	10		*										
200	イヌビエ	イネ科	在来種	1年草	10												*
201	クルマバナ	シソ科	在来種	多年草	10												*
202	コゴメカヤツリ	カヤツリグサ科	在来種	1年草	10												*
203	センブリ	リンドウ科	在来種	1~2年草	10-11			*									
204	ノジギク	キク科	在来種	多年草	10												*
205	ミゾソバ	タデ科	在来種	1年草	10-11	*	*										
206	ヤクシンウ	キク科	在来種	1~2年草	10-11	*											**
207	ヤノネグサ	タデ科	在来種	1年草	10		*										*
208	リンドウ	リンドウ科	在来種	多年草	10			*									*
209	アオゲイトウ	ヒュ科	北アメリカ	1年草	11												*

表4 磐山の植物(木本) 開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安(*:少ない, **:やや多い, ***:多い)

表4 嶽山の植物(木本) 開花月の(実)は果実または種子を示す; 出現区域の*は個体数の目安 (*: 少ない, **: やや多い, ***: 多い)

	種名	科名	葉	樹高 (株)は栽培種	開花月	出現区域											
						A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
36	マルバツツギ	ユキノシタ科	落葉広葉	低木	5										*	*	*
37	アカメガシワ	トウダイグサ科	落葉広葉	小高木	6										*		*
38	ウスノキ	ツツジ科	落葉広葉	小低木	(実6)								*				
39	ウワミズザクラ	バラ科	落葉広葉	高木	(実6)								*				
40	クチナシ	アカネ科	常緑広葉	低木	6					*							
41	コウゾウ	クワ科	落葉広葉	低木	(実6)					*				*			
42	コマツナギ	マメ科	落葉広葉	小低木	6-8	*										*	
43	ネムノキ	マメ科	落葉広葉	高木	6										*		
44	マルバハギ	マメ科	落葉広葉	低木	6-9	*			*	*							
45	クサギ	クマツツラ科	落葉広葉	小高木	7-9(実11)					*			*				
46	ナツフジ	マメ科	落葉広葉	蔓性	7							*					
47	サルスベリ	グミ科	落葉広葉	小高木(裁)	8								*	*			
48	コウヤボウキ	キク科	落葉広葉	小低木	9-10					*	*			*			*
49	クコ	ナス科	落葉広葉	低木	10									*			
50	チャ	ツバキ科	常緑広葉	低木(裁)	10-12(実12)									*			*
51	マンリョウ	ヤブコウジ科	常緑広葉	小低木	(実10-11)										*		
52	ヤブコウジ	ヤブコウジ科	落葉広葉	小低木	(実10-12)					*							
53	ムクノキ	ニレ科	落葉広葉	高木	(実11)	*											
54	ムラサキシキブ	クマツツラ科	落葉広葉	低木	(実11-12)					*	*		*	*			
55	サザンカ	ツバキ科	常緑広葉	小高木(裁)	12									*			
56	ナンテン	メギ科	常緑広葉	低木(裁)	(実12,白)										*		
57	ミカン	ミカン科	常緑広葉	小高木(裁)	(実12)								**	**	***	*	**
58	ユキヤナギ	バラ科	落葉広葉	低木(裁)	12								*				

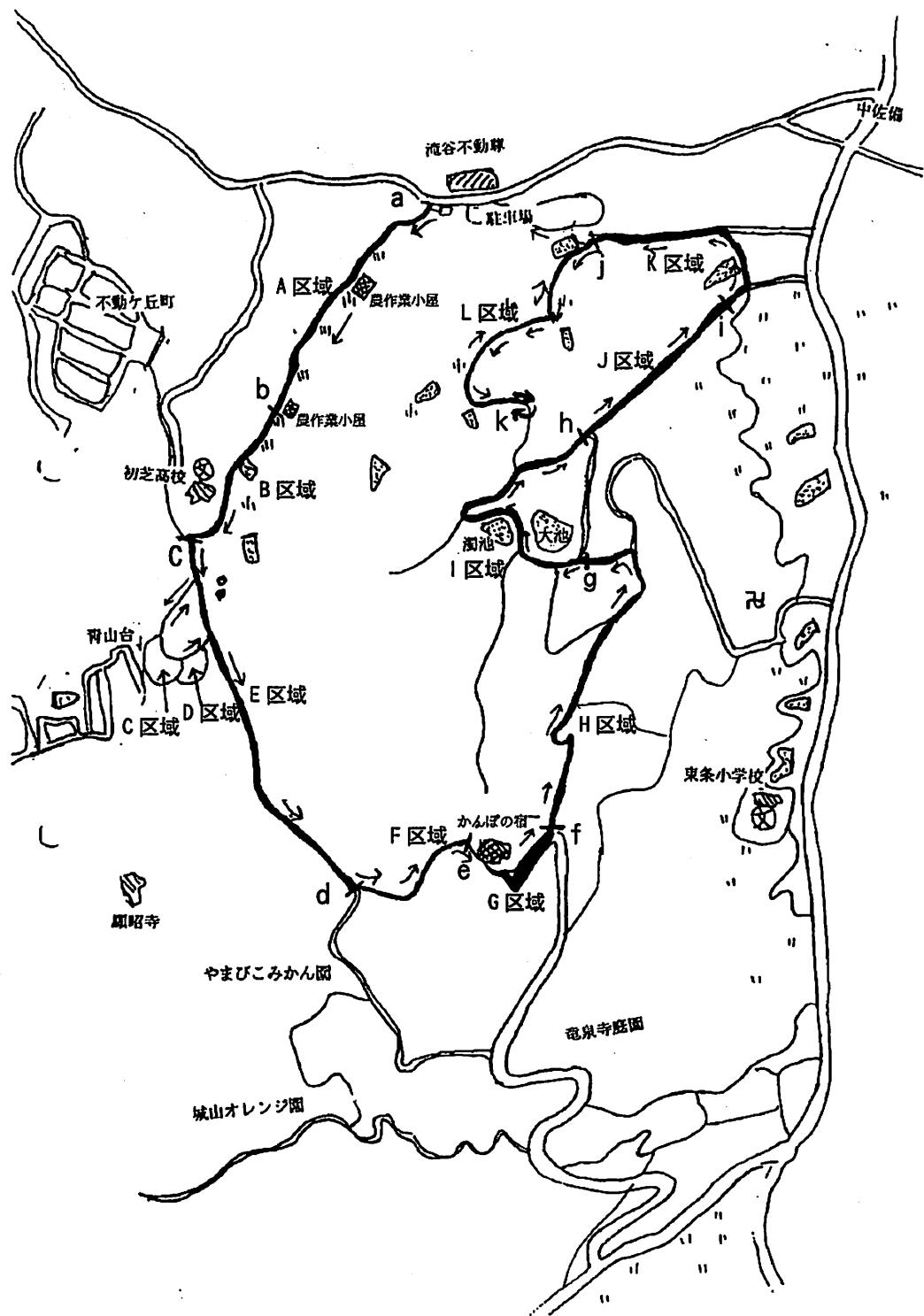


図1 植物調査ルート

編集後記

春はあけぼの ようよう白くなりゆく やまぎわ
すこし明かりて 紫立ちたる雲の 細くたなびきたる

冬の早朝、東の窓のカーテンを引けば、千年以上前の「枕草子」の情景そのままに、岩橋山のあたりから日が昇る。

職場が富田林から大阪市内に変わって丸3年、このいつもの夜明けが貴重に思える。ビルの谷間からでなく、金剛から二上につづく山並みから日が昇ることが……。

天気の良い日は、通勤方法を変え、石川河川敷のサイクリロードを柏原まで走る。「石川あすかプラン」で、人工物が増えたとはいえ、冬の河川敷では多くの鳥に出会える。いつもの雀、鳥、鳩以外にムクドリ・ヒヨドリ・モズ、水辺には、ユリカモメ・ハクセキレイ、コサギ・アオサギ・ゴイサギ・マガモ・カルガモ・ホシハジロ。霜が真白に降りた特別に寒い朝、なぜか鳥たちは元気だ。つられて私も力を込めてペダルをこぐ。

仕事の帰りは、金剛葛城を目指す。帰るところはいつまでも緑の山であってほしい。

早いもので、この会も今年、満10歳になる。バブルがはじけ、一時のような大規模開発は少なくなったものの、相変わらず緑（自然・田畠）は減り続けている。多くの「何とかしたい」という思いを寄せ集めて、「自然を守る」ための実を実らせたいと思う。

ご提案、ご意見を世話人までお寄せ下さい。（上角）

富田林の自然 No.6

1999年2月21日発行

発行者 富田林の自然を守る会

連絡先

田淵武夫：富田林市若松町4丁目16-21,

TEL & FAX 0721-24-7960

E-mail : tabuti@pearl.ocn.ne.jp

上角敦彦：富田林市若松町4丁目6-29,

TEL 0721-24-8757

三嶋富士夫：富田林市職労,

TEL 0721-25-1973